

イギリスはニュータウンの生まれ故郷といえる。第二次大戦後、ロンドン復興のため『大ロンドン計画』が作られた。ロンドンの周辺に 16km 程のグリーンベルトを造り、その周りに衛星状に独立型の都市を並べる計画で、それが NEW TOWN ACT = ニュータウン法として定められ、文字通りニュータウンとして開発された。(その原型は 20 世紀初頭に生まれた田園都市)

日本でも全国でニュータウンと呼ばれる街は数多くあるが、法律で定められた用語ではない。しかし、千葉、多摩、港北等のニュータウンは、計画人口が 20 万人級と大型で日本型ニュータウンの代表例と位置づけることが可能だろう。



イギリスの特徴的ニュータウン開発の紹介

レッチワース：最古の NT (1903 年開発開始の NT の原型) 計画人口 3.2 万人
1,800ha ロンドンから約 55km (田園調布はこれをなぞって作られた)

コンセプト 周辺農地、工場地区、商業地区、住宅地区を 1 セットとし、田園と都市の魅力を兼ね備えた自立的で継続可能な地域運営。

特徴 当初からの人口規模を守る小規模な「田園都市」。コンセプト通りに造られた街は、全体が庭園 (garden) の様相。住宅は一定のデザインコードに従って改修されている為、百年経っても今も、街の景観は変わらない。当初から積極的に何も作り込まないオープンスペースが位置付けられている。

発想の紹介 “田園都市論”:エベネザー・ハワード(1850~1928): 3つの磁石
TOWN(町)、COUNTRY(田園)より、TOWN COUNTRY(田園都市)の“磁力”こそが人々を惹き付ける。

背景 イギリスでは 18 世紀からの産業革命による大都市への人口集中と農村の荒廃により、大都市の劣悪な居住環境が限界に達していた。

ミルトンキーンズ：最大の NT (1967 年開発開始) 計画人口約 25 万人 6,800ha
日米等外国企業とその家族などが多く居住し、国際都市として発展した。

日本のつくば学園都市のイメージに近い。

コンセプト 高速道路、鉄道と運河によりロンドンとバーミンガムを結ぶ中間に新都市を造り、既存大都市への集中を緩和する。

特徴 自動車为前提の大規模開発でアメリカ的都市景観に近いが、既存の農村集落をそのまま取り込んでいること、運河が住宅地まで入り込む街区、多数の里山的公園等で伝統的地域環境を保全している。

発想の紹介 パブリックフットパス”Public footpath”= 公共の散歩道の発達。土地所有に優先する通行権を設定した遊歩道。他人の家先であろうと公德心を持って通らせてもらおうとのイギリスの伝統的制度。

カンパノールド：比較対象として紹介 都市機能高度集積型。計画人口 72,000 人

744ha 母都市グラスゴーとの競合で苦戦。

コンセプト タウンセンターは公共交通、自家用車、歩行者動線を立体的にし高度集積化を図る。

特徴 センター施設も閑散としており、都市的魅力形成に成功したとは見えない。グラスゴーの再開発が誤算？



アーヴィン：最後の NT 計画人口 84,000 人 4,960ha

コンセプト 新経済成長点の建設とスラムの解消が課題の開発。既存市街地の商業・行政機能を補完し、環境保全型に転換したニュータウン。

特徴 当初、旧市街とは別に新タウンセンターの整備を計画するが、時代の変化から戦略転換し、旧市街地と新市街地の一体化を図る。イギリスの NT 開発の顛末を体現して 1998 年事業終了。

“エリントン・カントリーパーク”の整備：炭鉱跡地を利用し小川、森、牧場、農場等に城跡を取り込み、乗馬、球技場などを加えた里山体験型公園整備を開発益により実現したことが示唆に富んでいる。

発想の紹介 地域の自然・文化環境の保全を根底に、旧市街地を活性化させながら、新旧市街地の一体化を図る。自然・文化資源を発掘し、子どもたちをその中で遊ばせることを通して、生活の伝統 (way of life) を伝える。

ニュータウン開発の着地点

ニュータウンの原型“Garden City”(田園都市)は英国人が古来受け継いできた自然への畏敬の念、美的秩序への感性を呼び覚ますことに成功した。

イギリスのニュータウン開発の顛末を見れば、着地点もまた“Garden City”の文脈上にあることが分かる。

同様の発想が千葉ニュータウンの計画にも見ることが出来る。千葉ニュータウンは北総線を分水嶺として、北は手賀沼水系、南が印旛沼水系になる北総台地上に広がっており、この両水系を巡っての様々な歴史が積層して来た。

印西牧の原地区は南北の谷津部分から駅前近くまで緑の軸が貫入しており、駅を降りると大規模な商業施設群を脇に見て、すぐ前の牧の原公園から緑の軸が谷津につながっている。これは今後の千葉ニュータウンの方向を示唆するものではないだろうか。



日本とイギリスの自然観の根底には、ストーンヘンジと三内丸山遺跡が太陽を意識していることに象徴される共通点が見られる。

“集落”が自然との間で生活の糧を生み出すことができる一方で、“都市”はお金や暴力で他所から糧を取り込む性格を持つ。地球環境が課題の今後の都市モデルは、“集落”的に周囲の自然を活かすものとならざるを得ないだろう。